

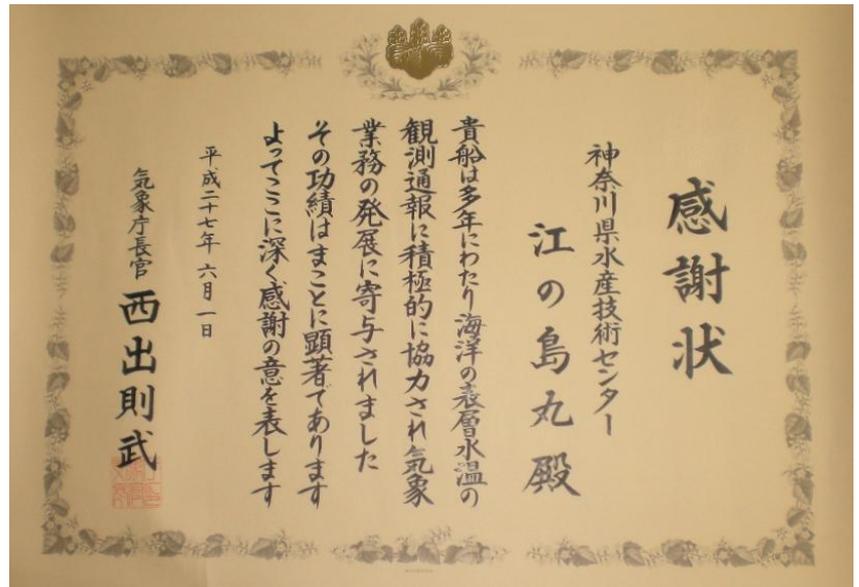


漁業調査指導船

## 江の島丸コラム

### 江の島丸が気象庁長官から表彰されました！！

平成 27 年 6 月 9 日に気象庁（東京都千代田区大手町）で開催された第 140 回気象記念日記念式典において、江の島丸が「多年にわたり海洋の表層水温の観測通報に積極的に協力し気象業務に寄与した功績」として気象庁長官から表彰されました。



江の島丸は、毎月初めに4～5日ばかりで相模湾から東京湾にかけての41測点で水温・塩分・透明度・溶存酸素量・プランクトン現存量など様々な項目(測点によって項目は異なります)の海洋観測を行っています。観測機器の進歩により、今では水温や塩分は表層から底層まで1m刻みで計測しています。



これらの観測データは今後の漁模様や海況予測のための基礎データとして欠かせません。

また、データは国立研究開発法人水産総合研究センター(以下「水研センター」)にも送られ、ここで各県の観測データが共有されています。

気象庁は水研センターを通じて江の島丸の観測データを入手し、気象予報や地球温暖化の研究の基礎データに活用しているとのことで、これが今回の表彰理由になります。

水産技術センターの前身である水産試験場による海洋観測調査は、1923(大正12)年5月に竣工した初代江ノ島丸を用いて同年10月に相模湾内の水深百尋(約150m)線に沿った7定点で水温(0・25・50・100mの4層)、透明度、水色、流向、風向風力、気温等の観測を行ったのが始まりで、戦争による数年間の中断はあるものの、90年以上に渡るデータが蓄積されています。

ちなみに、現在の江の島丸は7代目です。この間、江の島丸は日本海のイカや中部太平洋のキンメダイ等底魚類の資源調査を主な業務とし、海洋観測は「うしお」(相模湾試験場の「ほうじょう」の前身の漁業調査船)が担当していた時期もありました。これらの観測結果を見れば、90年間の神奈川県を取巻く海の状況の変化を垣間見ることが出来ます。

地球温暖化に伴う気候変動の解明に向けて世界中の研究機関がスパコンなどを駆使して様々な分析を行っていますが、その大元となるのは、江の島丸の海洋観測のように先人達が手作業で得たデータです。どんなに科学技術が進歩しても、過去のデータを再現することは絶対に出来ません。改めて、「データの継続性」という言葉の重みをひしひしと感じます。

もちろん、水産技術センターも研究機関として県民の皆様に新鮮で多彩な海の幸を安定的に提供していくために、常に新たな技術開発を行っていくことが第一の使命ではありますが、その時々々の神奈川の海の状況を後世へ正確に伝えていくことも重要な使命です。現在、これを担っているのはまさに江の島丸です。船員一同、今後も気を引き締めて業務に邁進してまいります。